

第1章 研究の経緯と目的

第1節 研究の経緯と目的

2018年に東京国立博物館で開催された特別展「縄文ー1万年の美の鼓動」をはじめとする縄文関連の様々な展示会や「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録運動など、縄文に対する社会的関心がかつてないほど高まりを見せている。今日の「縄文ブーム」は、特別史跡三内丸山遺跡の調査などによる後押しがあるとはいえ、岡本太郎による「縄文の美の発掘」（岡本 1952）や梅原猛による縄文観（梅原 1983）などに拠る部分が大きく、残念ながら必ずしも考古学による縄文研究に基づいているとは言えない。岡本も梅原も考古学者よりも先に縄文に弥生とは別の価値観を見出したという点で共通性をもっており、学術上の問題はともかく、その点は評価する必要があるだろう。

一方、弥生については伊東信雄をはじめとする研究者の長年の努力により東北地方でも水稻が証明されたが、今日なお、「みちのくの弥生文化」（大阪府立弥生文化博物館 1993）の評価に関して研究者間で温度差がみられる。縄文や弥生を日本史に位置付ける上で、北日本における縄文文化の終末やその後の続縄文文化・エミシ文化・アイヌ文化との文化的脈絡は、今日なお追及されるべき課題として残されている。

伊東信雄が東北地方における弥生の稲作の証明に取り組んでいた 1965 年、東北地方における縄文文化の終末と弥生文化の受容を解明するうえで鍵となる重要な発掘調査が、伊東をはじめとする東北大学考古学研究室により宮城県北の旧一迫町で行われた。山王罎遺跡の調査である。

東北地方縄文晩期の亀ヶ岡文化の研究は古くから行われ、日本考古学史の重要な位置を占めてきた。特に考古学の真価が問われた縄文時代の終末を巡るいわゆる「ミネルヴァ論争」では、亀ヶ岡文化の歴史的な位置づけが問題となった。亀ヶ岡文化研究の重要な舞台となってきたのが、豊かな情報が埋蔵されている大洞貝塚をはじめとする三陸沿岸の貝塚と、亀ヶ岡遺跡や是川中居遺跡などの低湿地遺跡であった。後者は地下水位の高い包含層に有機質の生活残滓が遺されている点で古くから注目されてきた。古くから知られていた東北地方の低湿地遺跡は、亀ヶ岡遺跡や是川中居遺跡など青森県内に偏っており、時期的には縄文晩期前半を中心とする。それに対して山王罎遺跡は東北中部に位置し、縄文晩期後半を中心とする。

1965 年に行われた山王罎遺跡の発掘では、厚さ 2m を超す縄文晩期中葉から弥生前期に至る有機質遺物を含む包含層が分層調査され、縄文から弥生への物質文化の変遷を解明しようと呼びかけられた。東区最下層の 25 層から出土した大洞 C2 式期の漆漉し布は、出土当初から希少な縄文時代の編布として、北海道斜里朱円周堤墓出土資料とともに注目された（伊東 1966）。

東北大学では調査直後から土器をはじめとする膨大な出土資料の整理・分析が進められ、山王罎遺跡の資料を用いた卒業論文や修士論文はこれまでに二桁に上る。遺跡が国史跡に指定された 1970 年には調査の概要が初めて学会報告された（伊東 1970）。調査から 20 年後の 1985 年には発掘調査時の写真が掲載された『山王罎遺跡調査図録』（伊東・須藤 1985）が刊行され、層序や出土土器 92 点の実測図が公表された。図録では層位ごとに分冊という形で今後正式な報告書を刊行していく方針が示されたが、図録の刊行から 35 年を経た今日、未だ刊行には至っていない。図録の作成を手掛けた須藤隆は、図録刊行以降、自身の論文等で西区Ⅲ層から出土した土器など一部の資料を取り上げて論じてはいるが、資料の全体像が示されることはなかった（須藤 1983・93・96a・96b・2003）。

東北大学による山王罎遺跡の発掘調査から 55 年、その後に増加した開発や学術調査に伴い亀ヶ岡文化期の低湿地遺跡の発掘調査例は増えたが、一つの遺跡で縄文晩期から弥生にかけての物質文化の変遷

を層位的に追えるのは今でも山王圀遺跡だけで、その出土品は他の資料で代えがたい価値を有している。

弘前大学は、縄文晩期に東北地方一円に栄えた亀ヶ岡文化を調査・研究し、その成果を地域社会に還元するため、2005年に人文学部の附属施設として亀ヶ岡文化研究センターを設置した。センターの開設を記念して開かれた展示会では、東北大学と栗原市教育委員会の協力により山王圀遺跡の資料（土器12点・漆塗り櫛1点・藍胎漆器1点・漆漉し布1点）も出品され、展示会の図録には土器の拓本や小川忠博氏が撮影した展開写真が掲載された（弘前大学人文学部亀ヶ岡文化研究センター2006）。

2014年には北日本に広く分布する縄文遺跡群を中心とする埋蔵文化財の調査・分析・保存等をはじめ、地域の考古学・文化財科学に関する教育・研究・社会貢献活動を行い、広く学界に貢献することを目的に、亀ヶ岡文化研究センターを母体として北日本考古学研究センターが設けられた（弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター2016）。この間、2011～2015年には特別経費（大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実）にもとづく文理融合型の学際研究プロジェクト「冷温帯地域の遺跡資源の保存活用推進プロジェクトー環境激変期における資源利用戦略の学際的研究ー」に取り組んだ。センターが進めてきた北日本特有の低湿地の遺跡資源を生かした、縄文から弥生にかけての環境激変期の人類の適応活動と新品種への選抜過程に関する研究は、保存科学分析、鉱物資源分析、古代米の形質・DNA分析を通して、過去に適応した技術や品種を探り、それを現在の育種に応用するという独創的な研究として大きな成果を上げている。センターでは、遺跡から出土する有機質遺物の分析と保存のための様々な機器類とそれらを操作する専門の人材を有しており、資料分析や保存処理の実績を積み上げてきた。X線CT（X-ray Computed Tomography）による観察に3次元画像解析を応用した漆工品の非破壊分析法は、縄文の漆工芸研究に大きく貢献している。

北日本考古学研究センターは、その研究の目的や方向性に照らし合わせ、未報告となっている山王圀遺跡出土資料の調査が必要と判断し、栗原市教育委員会ならびに発掘調査とこれまで資料整理を担ってきた東北大学に協力を打診した。その結果、2015年度、栗原市教育委員会とセンターが「史跡山王圀遺跡の漆工芸研究」の共同研究協定を結び、それに基づいて東北大学総合学術博物館の研究協力を得ながら、2019年度までの5ヶ年間で山王圀遺跡出土漆器の調査と保存を進めることとなった（弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター・栗原市教育委員会2017・2018）。2017年10月7日～11月12日には、栗原市埋蔵文化財センターから山王圀遺跡の主要な出土品を借り受け、弘前大学日本考古学研究センターで企画展「大山王圀展ー北上川下流域に華開いた漆の文化から弥生文化へ」を開催した。

2018年には東北大学考古学研究室から山王圀遺跡出土資料を扱った卒業論文や修士論文の写しの提供を受け、山王圀遺跡出土品の全貌解明に向け、整理状況の確認に着手した。

本報告は、山王圀遺跡出土漆器に関する栗原市教育委員会との共同研究の成果をまとめたものである。今後、漆器以外の出土品についても栗原市教育委員会と整理・分析に関する共同研究を続け、2024年度を一応の目途として、その間、遺物の種類ごとに資料化を進め、終わったものから随時、報告書を刊行していく予定である。

第2節 遺跡の位置とこれまでの調査概要

国史跡山王圀遺跡は宮城県北部の栗原市一迫真坂字山王に位置する。遺跡は奥羽脊梁山脈の一つ栗駒山と荒雄岳の山麓に源を発する一迫川とその支流である長崎川に挟まれた、東西250m、南北180m、標高約37～39mの自然堤防上に立地する（図1）。遺跡の南側を流れる長崎川の河床面からは約3m、水田面からは1～2mほど高い。遺跡の周辺は、標高50～150mほどの築館丘陵に挟まれた「真

坂面」と呼ばれる沖積地が一迫川・長崎川に沿って東西に広がっており、約4km上流には、弥生前期「青木畑式」の標式遺跡である青木畑遺跡、さらに1.5km上流には縄文晩期の巻堀遺跡などが所在する。山王囲遺跡の東方約10km、一迫川と迫川の合流点付近には、縄文後晩期の淡水性貝塚である嘉倉貝塚がある。縄文晩期には山王囲遺跡の北側の沼沢・低湿地に泥炭層や低湿地堆積層が形成され、弥生時代にかけて急速に埋没したと推定されている。

遺跡は戦前から知られており、中谷治宇二郎と八幡一郎による『日本石器時代遺物発見地名表』（東京帝国

大学編 1928）に、旧制築館中学校教諭の池内儀八からの情報に基づき、陸前栗原郡一迫村真坂山王から土器・土偶・石鏃・石斧・石皿・石錐・石錘・凹石の出土が記載されている。1948年、郷土史家で後に一迫町長となる狩野文朔によって遺跡の南端にある山王神社の東北で3本のトレンチ調査が行われた。同じく狩野により1958年に山王神社の北側で行われた発掘調査では、16×6mの調査区内から、縄文前期の大木3式・中期の大木9式・後期の南境式と宝ヶ峯式・晩期の大洞B～A'式の上器や石器、弥生土器（大泉式）・片刃石斧・アメリカ式石鏃、古墳後期の土師器などが出土し、炉跡も検出された（狩野 1959）。

1962年7月には杉原荘介教授をはじめとする明治大学考古学研究室によって、給食センターの東側付近（図2に示した2004年調査W区の北東側）で初めて本格的発掘調査が行われた（1次調査）。正式な発掘調査報告書は刊行されていないが、大洞C2式からA式にかけての豊富な資料が出土するとともに、大洞C2式期の墓壙と考えられる土壌群が検出され、赤色顔料の散布や石製小玉の一括出土がみられた（戸沢 1967、明治大学博物館 1991）。

1963年、一迫小学校統合校舎建築に伴い遺跡地内をボーリング調査したところ土器や獣骨が発見されたため、一迫町教育委員会は日本考古学協会の興野義一を担当者として翌1964年12月に体育館



図1 山王囲遺跡の位置

伊東・須藤 1985 の第1図を改変

建設予定地で約一週間の発掘調査を実施した（2次調査）。2次調査では、厚さ20cmを超す無遺物層を挟んで上部から弥生前期の大泉式、下部からは大洞C2式を主体とし一部A式・A'式を含む大規模な縄文晩期後半の遺物包含層があることや、有機質遺物が含まれることが判明した（興野1965）。

2次調査の成果を受け詳細な学術調査が必要と判断し、一迫町教育委員会からの依頼で、1965年4月10日～6月10日、伊東信雄教授をはじめとする東北大学考古学研究室による発掘調査が行われた（3次調査）。3次調査は、4月10日から5月11日に行われた発掘区の東半分の調査と、続いて5月2日から6月10日に行われた西半分の調査からなる（伊東・須藤1985）。翌1966年には山王罎遺跡出土品埋蔵文化財収蔵庫として遺跡地内に山王考古館が開設された。

1970年、一迫町は公民館等を遺跡敷地内に建築する計画を立てたが、考古学関係者をはじめとする識者や町民から保存を要望する意見が多く出されたため、計画を変更するとともに、同年12月には文化庁に対し国の史跡指定を申請し、翌1971年9月9日、山王罎遺跡は61,839㎡が史跡に指定された（文部省告示第191号）。

1972年には遺跡地内に一迫小学校のプール建設が計画された。現状変更許可申請を受けた官城県教育庁文化財保護課は、遺構や遺物包含層の有無を確認するため、同年4月に約500㎡の試掘調査を行った。試掘では晩期後半の遺物包含層が検出されたため、プールの建設場所の変更がなされた。

史跡指定を受け、一迫町は1971年から国と県の補助により史跡指定地の買いあげと、史跡公園としての保存管理が計画され、表面観察とハンドオーガーによるボーリング調査が行われた（一迫町教育委員会1976）。1976年以降、10年にわたる史跡整備により山王史跡公園が形成された。

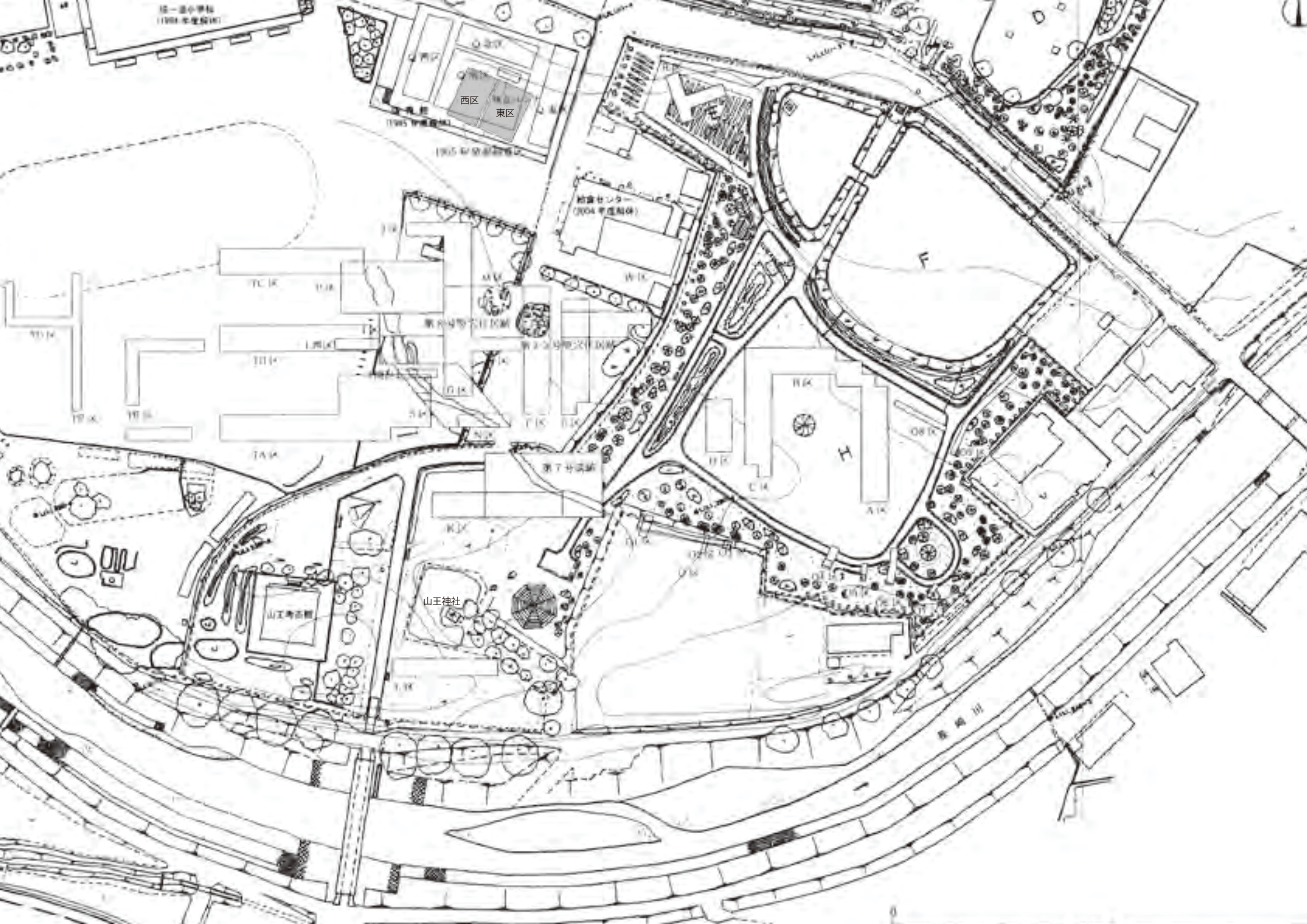
1990年、史跡地内にある一迫小学校の移転することが決まったのを受け、その跡地の整備がきっかけとなって、町は1993・94年度に国指定史跡山王罎遺跡保存活用基本計画策定委員会を組織し、遺跡全体の整備計画の見直しに着手した（一迫町教育委員会1995）。整備基本計画では「地形復元レベルと縄文晩期の遺構面の確認」、「自然・社会景観の復元的調査・研究」、「生業形態に関する総合的調査・研究」、「縄文・弥生時代の技術復元とその応用」、「調査・研究成果の公開」を掲げ、それに基づき、1995～99年に史跡整備に向け内容確認のための発掘調査が行われた（一迫町教育委員会1996・1997・1998、栗原市教育委員会2007・2013）。1998年には史跡指定地の西側に埋蔵文化財センター（山王ろまん館）が開設され、現在は1965年や1995～99年の発掘調査で出土した遺物を展示・収蔵している。

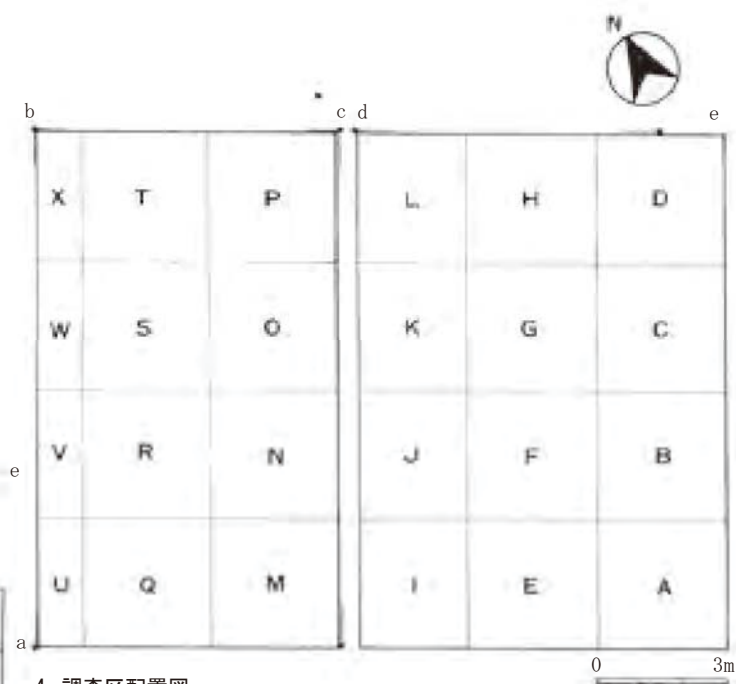
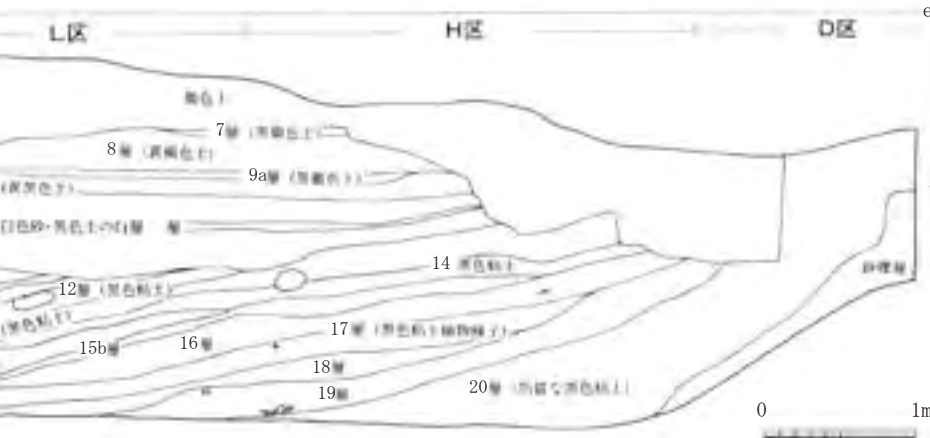
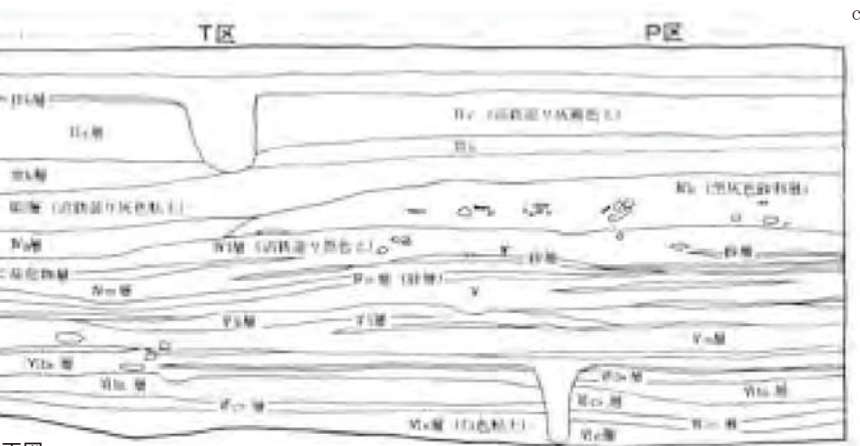
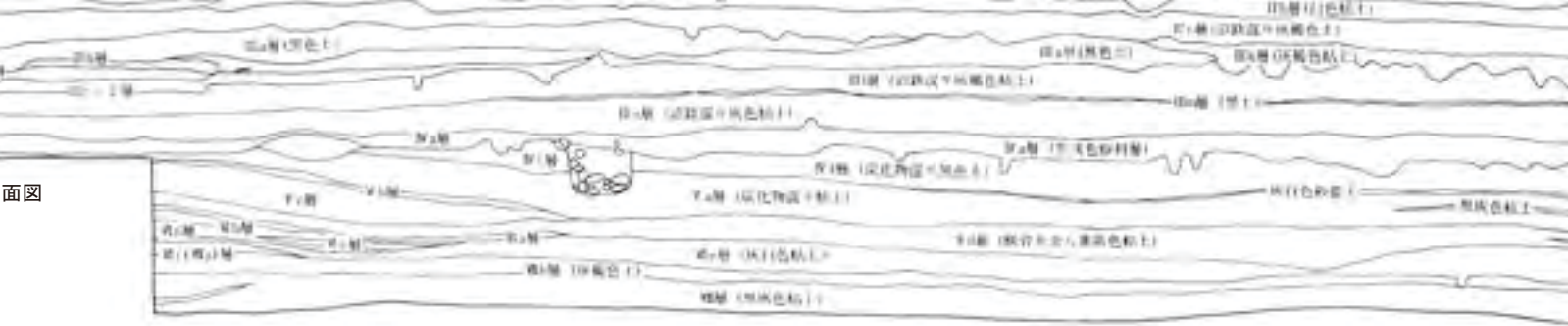
第3節 1965年発掘調査区の層序と検出遺構

東北大学による1965年の調査は、前年の2次調査区を取り込む形で、北西—南東の方位（N64°W）に長さ16m、幅12mの調査区を設けて行われた。調査区は3m四方のグリッドに分割され、南東隅から北西隅に向かって順次Aから順に名前がつけられている。調査はAからLまでの東区が先行して行われ、東区の調査終了後にMからXまでの西区の調査が実施された。調査総面積は186㎡、深さは約2.6mに達した（図2・3）。

南北ベルトを挟んで東区と西区で異なる層名が用いられている。ベルトの幅は約50cmで、東区と西区は近接しているにもかかわらず、層相は大きく異なっている。東西調査区の層序は、層の特徴や含まれる土器型式を手掛かりとして大まかには対比できるが、細かな突き合わせはできていない（図3・4）。各層の特徴については既に『山王罎遺跡調査図録』（伊東・須藤1985）で報告されているので、ここでは、層序に従い堆積層と検出遺構の時期を中心に述べる。

東区の層名にはアラビア数字が用いられており、表土（耕作土）の1層から最下層の26層まで細分





型式	西区			東区
	西側	東側		
	Ⅰ（耕作土）			1 ～ 6 （1964 年の調査による攪乱層）
	Ⅱ a			
	Ⅱ b			
	Ⅱ c			
山王Ⅲ層式	Ⅲ k			7
	Ⅲ a			
	Ⅲ b			
	Ⅲ c-1			
	Ⅲ c-2			
	Ⅲ l			
	Ⅲ m			
	Ⅲ n（間層）			8（間層）
砂沢式併行	Ⅳ a（北半）			9a
	Ⅳ b（北半）			
	Ⅳ j（南半）			
	Ⅳ k（南半）			
大洞 A' 式	Ⅳ l			9b
	Ⅳ m			
	Ⅳ n			
大洞 A 2 式	V a	V k		10 11a 11b 12 13 14
	V b-1	V l		
	V b-2	V m		
	V b-3	V n		
	V b-4			
	V b-5			
	V c-1			
	V c-2			
	V c-3			
	V c-4			
	V c-7			
	V d			
大洞 A 1 式	Ⅵ a			
	Ⅵ b			
	Ⅵ c			
	Ⅵ d			
	Ⅵ e			
	Ⅵ f			
	Ⅵ g			
	Ⅵ h			
2 式新大洞 C	Ⅶ a			15a ～ 26
	Ⅶ b			

二重線は遺構検出面

されている。1～6層は1964年の調査によって掘削された攪乱層で、7層以下がプライマリーな堆積層である。8層は遺物をほとんど含まない黄色褐色土層で、層の特徴から西区のⅢn層に対比できる。E区の8層上面では山王Ⅲ層式の甕の埋設遺構が1基検出されている。11b層から上層が水平堆積なのに対して、12層以下は東から西に向かって傾斜している。主体となる土器は、7層が山王Ⅲ層式、9層が大洞A'式から砂沢式に併行する山王Ⅳ上層式、10～14層が大洞A1・A2式、15a～26層は大洞C2式である。

西区の層名にはローマ数字が用いられており、表土（耕作土）のⅠ層から最下層のⅦb層まで細分されている。Ⅲn層は灰色の粘質土層で、遺物をほとんど含まない。Ⅳ層上面（Ⅳb／Ⅳk層上面）では地床炉2基・石囲炉1基・土坑1基が検出されている。Ⅳl層上面では石組遺構8基・合わせ口甕棺1基が検出されている。Ⅴ層上面ではO区とP区にまたがる形で東壁より長径3m、幅2m程度の石囲遺構が検出されている。主体となる土器は、Ⅲk～Ⅲm層が山王Ⅲ層式、Ⅳa・Ⅳb・Ⅳj・Ⅳkが山王Ⅳ上層式、Ⅳl・Ⅳm・Ⅳnが大洞A'式、Ⅴ層が大洞A2式、Ⅵ層が大洞A1式、Ⅶ層が大洞C2式新段階である（図5）。

(関根達人)

図4 1965年調査区の基本層序



図5 1965年調査西区の層位と出土土器型式

須藤1983、伊東・須藤1985掲載図をもとに作成

【引用文献】

- 一迫町教育委員会 1976 『史跡山王罎遺跡保存管理計画書』
- 一迫町教育委員会 1995 『史跡「山王罎遺跡」保存活用基本計画』
- 一迫町教育委員会 1996 『国史跡山王罎遺跡発掘調査報告書』Ⅰ
- 一迫町教育委員会 1997 『国史跡山王罎遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
- 一迫町教育委員会 1998 『国史跡山王罎遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
- 伊東信雄 1966 「縄文時代の布」『文化』30-1 pp.1-20
- 伊東信雄 1970 「宮城県一迫町山王遺跡」『日本考古学年報』18 pp.80-81
- 伊東信雄・須藤隆 1985 『山王罎遺跡調査図録』一迫町教育委員会
- 梅原猛 1983 『日本の深層—縄文・蝦夷文化を探る』佼成出版社
- 大阪府立弥生文化博物館 1993 『みちのくの弥生文化』平成5年春季特別展
- 岡本太郎 1952 「四次元との対話—縄文土器論」『みづゑ』558 pp.3-18 日本美術出版
- 狩野義章 1959 「宮城県栗原郡一迫町山王遺跡の調査」『一迫町古代史』第三輯（ガリ版刷）
- 興野義一 1965 「宮城県山王遺跡出土の弥生式土器について」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』p.7
- 栗原市教育委員会 2007 『国史跡山王罎遺跡発掘調査報告書』Ⅳ
- 栗原市教育委員会 2013 『史跡山王罎遺跡保存整備事業報告書』
- 須藤隆 1983 「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」『考古学雑誌』68-3 pp.1-53
- 須藤隆 1993 「山王罎遺跡の学術的意義」『新・縄文創世記』一迫町 pp.2-5
- 須藤隆 1996a 「史跡山王罎遺跡の調査」『宮城の文化財』100 宮城県文化財保護協会 p.4
- 須藤隆 1996b 「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告』別巻33 東北大学文学部日本文化研究施設 pp.1-40
- 須藤隆 2003 「東北日本における晩期縄文集落の研究」『東北大学文学研究科研究年報』52 pp.30-88
- 東京帝国大学編 1928 『日本石器時代遺物発見地名表』岡書院
- 戸沢充則 1967 「宮城県栗原郡山王遺跡」『日本考古学年報』15 pp.90-91
- 弘前大学人文学部亀ヶ岡文化研究センター 2006 『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』
- 弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター 2016 『弘前大学の考古学—弘大考古のあゆみとその成果』
- 弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター・栗原市教育委員会 2017 『ニュースレター史跡山王罎遺跡の漆工芸研究』1（研究始動）
- 弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター・栗原市教育委員会 2018 『ニュースレター史跡山王罎遺跡の漆工芸研究』2（保存活用に向けて）
- 明治大学博物館 1991 『縄文晩期の世界』明治大学考古学博物館蔵品図録2